久内清孝*: 異邦植物名實考

Kiyotaka HISAUCHI*: Some foreign plants cultivated in Japan

○ビロウドウマノスズクサ（前川氏新稱）

埼玉縣春日部（舊粕壁）にある厚生省衛生試驗所の藥草園に白木香の名で浙江省から送られて來たという珍物が栽培されている。この植物は明らかに藤本で春に下部から若枝を簇生し，その若枝は他物にからみつき或は地上を匍う。若枝と葉は絹糸狀毛に密に被はれ特に葉の裏は多毛である，そのため全株が雪白に見える。葉形は廣卵形，心脚で，ややオオバノウマノスズクサのそれに似ている。花すなはち蓇葖は外部絹毛に被われ，中部でくびれ下部が前屈し，上緣はやや上向に擴がり，その內面は汚綠色で內面の半部にやゝ放射狀の褐線がある。この植物は小さくて花をつけ葉が白くて美しいので園藝價値がある。筆者はこれを *Aristolochia mollissima* Hance (in the Journal of Botany (1879) : 300) と鑑定する。本品に該當する標本が東大植物教室に 1 枚ある。それは F. B. Forbes が上海附近の Feng wang shang で 13 V, 1877 に採集したもので "very rare" なる手記がある。この日附は H. F. Hance が上記文獻に Novam Aristolochia Speciem なる表題の下に記載したものと同一であるから，東大標本は明らかに type の副品の一でまことに記念すべき貴重品である。尙白木香なる名稱は明代の作である本草彙言 天啓甲子＝ 1924) に「今肆所有。止白木香也。」とか「廣州舶上。世所用有之白木香」などの記事が見え，また廣東新語(康熙庚辰＝1700) 莞香のところに「至四五歲乃斬其正幹鬻之是爲白木香香在枹而不在幹幹純木而色白故曰白木香」云々。また諸香の條下に「其曰白木香則東莞香木之枝幹也」とある，そうして我國では之等二書がそれぞれ本草通串や古名錄に反映している。之等二書の文ではとても分類學の參考にならないが廣東新語の文では木本らしいので問題のものと縁遠い感がある。いずれにしても上記二書は名稱上の出典にはなるが *A. mollissima* と同一物か同名異物かは決定しかねる。しかし現在白木香の名で送られて來たとすれば中國のどこかでこの名が用いられているものかも知れない。尙中國中部の實狀に詳しい前川博士にきいて見たら本種は安徽の丘陵地に見られ現地では苦兒籐(Quô-len)と呼んでいるもので，植物名實圖考(道光 28＝1848) 二十一卷の尋骨風に當るのでないかと云われた。同書には「尋骨風湖南岳州有之蔓生葉如蘼蕪柔厚多毛面綠背白秋結實六稜似使君子色青黑子如豆」とある。

この記事と圖に徵し妥當な見解と思われる。更に同氏は現地滯在中既にビロウドウマノスズクサの和名を用意しているので，同氏の承諾を得て，ここに新和名として公表することにした。これで一應漢名問題は解決したことになるが名實圖考十三卷濕草の部には全く別のものに尋骨風をあてて居るので，どちらが本當か判斷に迷わざるを得ない即ち白木香に同名異物があるらしく，また尋骨風にも同名二物があることになるから前川

* 東邦大學藥學部 Pharmaceutical Institute, Tôhô University, Tsudanuma, Chiba Pref.

氏が收錄した苦兒籐が浮び上がることになるが恐らく一方言に過ぎないであろう。要するに學名はたしかで其和名はビロウドウマノスズクサとし，漢名は中國の君子の示教をまつより外に解決の方法がないが，便宜上尋骨風（名實圖考二十一卷）としておく。

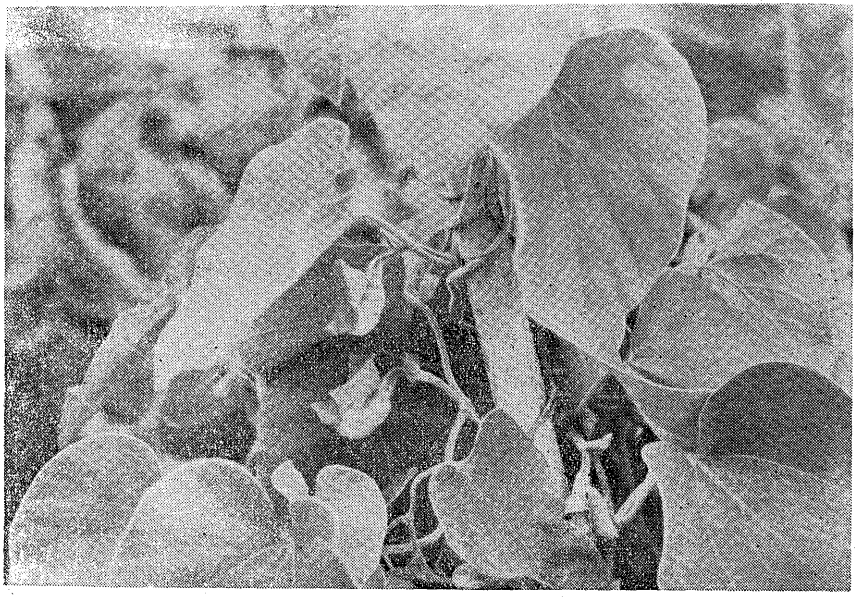

Fig. 1. *Aristolochia mollissima* ビロウドウマノスズクサ

○珍至梅　園藝植物のカタログを見ると珍至梅という至つて珍らしい名が目につく。横濱植木會社の目錄である園藝要覽（昭和 16年 (1941) 秋）には改良珍至梅の名で寫眞と共に「支那にては本種を眞珍梅（チンルウメ）と稱し特に珍重す」と解說つきで出ているものは *Sorbaria stellipila* Schneid. var. なる學名を用いてある。この學名ではホザキナナカマドの一形となるが寫眞で見ると *S. Kirilowii* Regel として佐藤潤平氏が滿蒙樹木圖說（昭和 8 (1933)）でニワナナカマド，北川政夫博士が滿州植物考（昭和 14 (1939)）でハナナナカマドと命じたものに似ているが實物を見たことがない。更に大和農園が同じ名で賣出したというものも，前述の園藝要覽や滿蒙樹木圖說所載のものと同一物らしい。今之を檢するに樹高 2.3 mになる細い木で小葉片の長さ 3.6 cm，ほぼ楕圓狀披針形，尾狀漸尖頭，基部やや楔狀で重鋸緣，齒は2-3 細裂，裏面は花序と共に平滑なるも脈腋に單細胞毛の小塊殘存，花徑 7.5-8mm，雄蘂は 23-5 本で瓣片よりいささか長く，その平均比は 1.3 倍。蔓，萼蒾共に無毛である。一般には *S. Kirilowii*（ニワナナカマド）として扱われているから，それでよいと思われるが，原記載や Schneider の澗葉樹圖說の圖解では *S. Kirilowii* は雄蘂が花瓣より短く，柱頭が萼蒾の頂下に挿入

された様になつていることになつている。若しこの點を文面通りにうけとるとすれば，*S. Kirilowii* とは別になり *S. assurgens* Vilm. & Bois. が浮び上つて來る。即ち Vilmorin の Fruticetum Vilmorianum で見られる樹姿や，花辨が雄蘂より短いことや，雄蘂が 20 であることや，小葉片の側脈が 25 對又は以上の點で *S. assurgens* を想起することも出來るが，*S. assurgens* の實物を見ない以上何んともいえないからここでは疑問をいだきながら *S. Kirilowii* 說に從つておくことにする。

しかしもう一つ現在私の檢した市販の珍至梅は雄蘂が花瓣の倍長で蔓と子房の頂部に毛があるから *S. Kirilowii* には當らず結局 *S. sorbifolia* 系になり Rehder や北川氏のいう様に蔓や實 (follicle) に毛のある點で var. *stellipila* Max. になる。ところが，この雄蘂は 40–50 だというのに，私の見たものは約 35 である。要するに雄蘂數で一致しないが *S. sorbifolia* var. *stellipila* の改良すなはち栽培形なのであろう。そうして前述の *S. Kirilowii* 的のものとともに珍至梅を名のらされている様である。また珍至梅なる名は矢部吉禎氏の南滿州植物目錄の珍珠梅と因果關係があるものと思われる。終りに二つの珍至梅を比較して見よう。

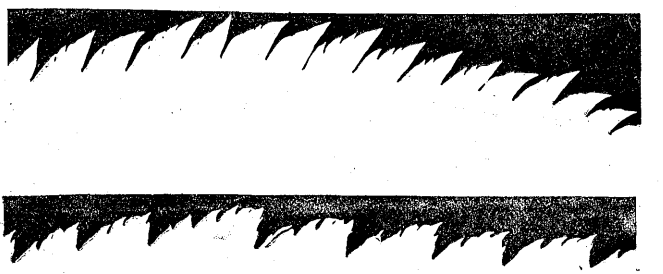

Fig. 2 *Sorbaria sorbifolia* var. *stellipila* 珍至梅，(上) 大和農園のものと (下) 余の檢した市販品との小葉の緣邊の比較．(注意：葉緣が白く出してある)．

A. 大和農園のもの		B. 余の檢査した市販品
小葉片		
數	13–21	15–17
裏	脈腋に單細胞毛が殘存する	2 列多細胞性の柄のあるヒドラ狀毛滿布
側脈	25 對以上	約 20 對
鋸齒片	3 小齒あり	4 小齒あり
花		
直徑	8–10mm	9–10mm
辨片の橫徑	3mm	4mm
雄蘂數	23–25	33–35
雄蘂と花辨と長さの比	1–1.3	2–2.1
蔓の毛	なし	あり
萼蒾の毛	なし	あり

○黄金コデマリというのがある。すなわち *Physocarpus opulifolius* Max. だとすれば植物總覽第1版 (1923) のケアメリカシモツケ，テマリシモツケの黄葉を混生する品種である。

○利久梅は *Exochorda racemosa* Rehd. のことで和名はウツギモドキ。

○タマアザミの名で切花になつているものは *Liatris scariosa* Willd. である。

○アフリカヒナギクの名で園藝目錄に出ているものは *Dimorphotheca aurantiaca* DC. で石井勇義氏の園藝植物圖譜第1版（昭和 6）(1931) 3巻で同氏がアフリカキンセンと新稱したもののことで，石井氏は園藝大辭典第1巻にもその名を用いている。

○無名の一品に *Coreopsis verticillata* L. がある。ハルシャギクに似ているが，葉がかたく舌狀花瓣がハルシャギクの樣に大きく裂けないで，先端部が極く少しく三裂し，色は黄色である。何れ新和名が必要になろう。

○アフリカヒマワリというのがある。*Venidium decurrens* Less. である。

○フェショアという苗木が近年賣出されている。すなわち *Feijoa* (= *Orthostemon Sellowiana* Berg.)で南米産フトモモ科の植物である。

○オウムソウと花屋で近頃呼ぶものは故松崎直枝氏が近世渡來園藝植物 (1934) で *Beloperone guttata* T. S. Blandegee 和名コエビ（小海老）ソウとされたもので，この和名は英名である Shrimp plant に因んだものであつた。

○モメンヅルの一産地（久内清孝）Kiyotaka HISAUCHI: A new locality of *Astragalus reflexistipulus* Miq.

1952 年群馬縣吾妻郡六合（クニ）村新花敷に於てモメンズルを得た。この植物の一産地として記錄しておく。

□フロラは中々つきとめ切れぬものか

英國のフロラといえば探求の歷史も古く，地形的にも比較的簡單であつてもう調べつくされたものと思われていた。Nature **168**: 934-5 (1951, Dec.) によると大英博物館で The Botanical Society of British Isles が英國内での昨年の新發見の植物についての展覽會をやつた記事が出ている。再檢討による細かい種類，たとえば *Cardamine pratensis* を4種に分けたなどの外に，多數の新檢出が擧げてあるのもまだそんな餘地があるかと思われたが，スコットランドでイワウメ (*Diapensia lapponica* L.) の發見で一科を加えたこと，チシマミヤナギ (*Koenigia islandica* L.) の發見とを特筆大書していることには驚いた。人の目はとどかないものであり，天地は廣いと泌々思つた。さて振りかえつてみると日本の樣な "豊富な" フロラのところはまだまだ見込があるというか，又は逆にいつになつたらきりがつくというか。いささか複雜な氣持にならざるを得ない。

（前川文夫）